

寮歌の時代 II (03・01・23)

岸 田 達 也 (昭17・9文乙)

—

私は四年前の一月の十八日会で「寮歌の時代」と題する話をいたしました。本日の話はその続編であります。今回お話いたしますのは『三高歌集』に入っている明治三十七年沢村胡夷作詞の「林下のたむろ」であります。本日の話の発端は昭和一七年五月の記念祭、すなわち生徒総代が市倉宏祐、寮総代が私のことです。

市倉生徒総代はこの年の記念祭委員長でもありましたので、記念祭の行事の一つとして『三高歌集』の中で従来歌われなかった歌を発掘して歌うということを発表いたしました。本日まで、市倉の記憶と私の記憶を突き合わせて確認できた歌は次の三つであります。

第一は「行旅」、歌い出しは「見よ行人の一群ひとむねは」、大正三年団伊能作詞、小川昇作曲。団伊能さんは私と同じ渋谷の青山学院中学部の先輩で、三高から東大の美術史を出られまし

た。その関係で息子の団伊玖磨も青山学院中学部、私の丁度二年後におりました。第二は「林下のだむろ」、歌い出しは最初の吟詠一行の次は「夢驚かすさよあらし」、明治三十七年沢村胡夷の作詞。作曲については本日の問題でありますので、これは後で説明いたします。第三は「新生頌歌」、歌い出しは「めざめよ暗き野のはてに」、大正四年久米美作男作詞、菅圓吉作曲です。このうち第一の「行旅」は文甲一年から三年までの有志がグランドで歌う。第二の「林下のだむろ」は文乙、文丙の一年から三年までの有志が、文甲の後で歌う。第三の「新生頌歌」は理科の一年から三年までの有志が、文乙、文丙の後で歌う。理科はこの一つのようなです。この「新生頌歌」の作詞者は久米美作男となっておりますが、三高同窓会の『会報』89（一九九九）掲載の海堀君の調査によれば、「行春哀歌」の作詞者矢野禾積（峰人）の別の筆名ということであります。つまり「新生頌歌」は、作詞者矢野峰人、作曲者菅圓吉となるわけであります。このように見てきますと、従来意外に歌われなかつた名歌が発掘されております。

本日取り上げますのはこのうち明治三十七年沢村胡夷作詞、丁度明治三十八年の「紅もゆる」作詞の一年前の「林下のだむろ」であります。この歌は本日ご出席の方々のほとんどがご存じないと思います。第一、昭和一七年五月の記念祭までは歌われていないのです。この「林下のだむろ」は歌ったこともなければ、また入寮以来伝授されたこともありません。

ん。つまりこの「林下のたむろ」は昭和一七年五月の記念祭で、前もって三高の本館の屋上で譜面が読めるただ一人の生徒、これが譜面通りに歌う、それからあと口伝で習う、私もその一人であります。数十名の文乙、文丙の有志がこの本館の屋上で口伝で習ったその歌をグラウンドで歌って、そのまま空に消えたまぼろしの歌であります。しかもこの歌は歌詞も曲も『三高歌集』中きわめて異色のものであります。第一、この「林下のたむろ」はいわゆる寮歌ではないのです。『三高歌集』（一九九八年版）の歌詞はそれまでの歌詞とは違っております。とくに二つの個所で異なっております。一つは六行目の「窓による妻の物思ひ」これは譜の方は「メ」になっておりますが、そこに漢字の「妻」があてられております。今ひとつは九行目の「木暮こぐぼ」であります。この「木暮」はそれまでの歌集では「夕暮」となっております、私どもは「夕暮」で習いました。とくに注目すべきことはそれまでの歌集、私どもが入学したときの歌集は昭和一四年版であります。そこでは「妻」が「め」というひらがなになっておりました。この「め」とひらがなになっているところに「妻」という漢字が入っていることであります。これはとくに注目すべきことであります。私はこの歌を覚えましてから六〇年、時折口ずさんでおりましたが、このひらがなの「め」は女であろうとは思っておりましたけれども、女といましてもいろいろありますので、はっきりした意味をつかみかねておりました。このたびそこに「妻」とい

う漢字が入っていることではっきりいたしました。もともと、この訂正は原典通りではありません。いま述べた「妻」、これに原典では「め」とふりがながふってありますのでこの方がはつきりするのです。なお歌集では「月、洛陽にくだけ落つ」とありますが、この「洛陽」は原典では落ち葉の「落葉」であります。(追記。この「妻」とくに「落葉」は『三高歌集』(二一〇〇三年版)でも原典通りではありません)。なおこの原典の『嶽水会雜誌』(明治三十七年二月印刷発行)の復刻版を、最近東京で発見したのが本日ご出席の大嶋知子さんで、これは大発見であります。この報せが一昨日ありまして、そのコピーを早速送ってもらって昨日受け取りました。ですから一昨日から昨日にかけてこのレポートは一枚増えているのです。この部分が実は大変面白い話になります。最後になりました本邦初発表の話をいたします。

そういうわけで、つまりこの「林下のたむろ」は、林下のたむろすなわち林下の屯嘗、日露戦争で出征中の夫を妻が窓に寄って思う歌であります。ちょうど原典には編集子の評があります。これは珍しいものですから、その主要なところだけ読みます。「林下のたむろ」、「頗る佳作」、「就中「びんのはつれをかざりては、雲のかなたへ流れいる」とあはれる哉、あえかに若き新妻の、思は堪へず千里異域の愛夫、かの思この思に半夜瞑想の夢より醒め、窓に凭れて物思ひ、そが思へるさまを唯客観に叙して筆神にいる」。これは私

林 下 の や む る

澤 村 胡 夷 作 歌

山 禽 叫 絶 夜 響 々 ヲ
 マ オ ヲ ロ カ ス サ ヲ ヲ ラ ヲ
 ハ ル ケ ク ニ ヒ ガ ヲ ム ム ル 森 影 ヒ ト ツ ホ シ ヲ エ セ リ フ ル サ ト ノ
 マ ツ ニ ム ル マ ノ, ム ノ ム モ ヒ ヒ ツ ノ 樹 ノ 影 カ カ ヲ ヲ カ ハ
 カ 鳴 ノ カ ナ 森 ム チ ガ レ ト ル
 カ セ ハ コ グ レ ラ フ キ ア ヲ ヲ ツ キ ラ ク ヲ ヲ

山禽叫絶夜寥々

ゆめ驚かすさよあらし

あほぐくもるのはるけくに

東へ走る星一つ

星よ、五千里、ふるさとの

窓による妻の物思ひ

びんのほつれをかざりては

雲のかなたへ流れいる

風は木暮をふきあれて

月、落葉にくだけおつ

こよひの夢は森のかけ

征衣に霜やさむからむ

The image shows a musical score for the piece '山禽叫絶夜寥々'. It consists of two staves of music. The top staff is a vocal line with lyrics written below it. The bottom staff is a piano accompaniment line. The lyrics are: 山禽叫絶夜寥々 / ゆめ驚かすさよあらし / あほぐくもるのはるけくに / 東へ走る星一つ / 星よ、五千里、ふるさとの / 窓による妻の物思ひ / びんのほつれをかざりては / 雲のかなたへ流れいる / 風は木暮をふきあれて / 月、落葉にくだけおつ / こよひの夢は森のかけ / 征衣に霜やさむからむ. The score is written in a traditional Japanese musical notation style, likely a form of staff notation used in early 20th-century Japanese music.

の解釈と同じで、あえかに若き新妻の、思は堪へず千里異域の愛夫、愛しき夫 とうな
つております。ですから、これは日露戦争で出征中の夫を妻が「征衣に霜やさむからむ」
と窓に寄って思う歌であります。

なお、冒頭の漢詩一行、これは幕末の儒者河野鐵兜（一八二五―一八六七）の「芳野」
と題する南朝追慕の詩の最初の一行からとったものと思われまゝ。その原詩は次の通りで
あります。

山禽叫断夜寥寥

山禽叫断夜寥寥
さんきんきょうだん りやうりやう

無限春風恨未消

無限の春風恨未だ消えず
むげんのはるふうげんまだしょうえず

露臥延元陵下月

露臥す延元陵下の月
ろがえんげんりやうが

满身花影夢南朝

满身の花影南朝を夢む
みみのかげいなんちやうをむむ

この最初の一行「山禽叫断夜寥寥」の「叫断」を「叫絶」に変えてとっているものと思
います。延元陵というのは後醍醐天皇の御陵です。「露臥す延元陵下の月、满身の花影南
朝を夢む」。この後醍醐天皇つまり南朝を追慕する詩の最初の一行からとったものと思わ
れます。

この「林下のたむろ」は、沢村胡夷二三歳のときの最初にして最後の詩集『湖畔の悲歌』（明治四〇年一月、京都文港堂書店刊行）に収められておりますが、この詩集には、沢村胡夷が作詞してこんにち『三高歌集』に収められている「紅もゆる」ほか「水上部歌」は収められていないのです。つまりこの詩集に収められた「林下のたむろ」は、沢村の三高時代の作詞ではありますが、歌詞からしてもいわゆる寮歌ではないのです。これは先ほどもいいましたように、新妻が愛しき夫を思う歌などというのは寮歌ではありません。一高は『一高寮歌集』ですが、三高は『三高歌集』でありますから、これは見て分かりますように、意外な歌が入っております。そういうわけでありますから、これに収められてもなんら差し支えはないのであります。しかも詩集『湖畔の悲歌』に収められた作品のうち、この「林下のたむろ」のみ作曲者名のない曲譜が付けられております。

さらに注目すべきことは、この明治四〇年の詩集『湖畔の悲歌』に掲載されている「林下のたむろ」の曲譜は、原典の『嶽水会雑誌』（明治三七年）の曲譜と同じです。ところが、『三高歌集』の「林下のたむろ」の曲譜はこれとは異なるところがあります。

二

それではいったい『三高歌集』に掲載されている曲譜はどのような事情でここに入っ

いるのか。『三高歌集』というものは明治四四年に始めて刊行されており、「林下のたむろ」は何年の歌集から入っているのか。この間の事情については、今のところ未調査で分かりません。ただあとで原譜と『三高歌集』に掲載されている曲譜とをテープで流します。これは本邦初公開で、これにつきましては村尾清一君の娘さんのしおりさん（東京学芸大学でピアノ専攻）のご協力によるところ多大であることを申し添えておきます。このテープを聴けば、この曲がいかに異色なものであるかがお分かりになると思います。

その前にこの曲と関連する限りで、きわめて簡単に沢村胡夷の略歴を述べておきます。なお、沢村胡夷につきましては、本日ご出席の大嶋知子さんのご労作『沢村胡夷全詩集』（昭和四二年、中央公論事業出版）が詩人沢村胡夷の全貌を明らかにする唯一の労作で、それに収められております「沢村胡夷―その生涯と詩業―」、これが非常によく調査されたものでありますし、また先般の十八日会でも大嶋さんが話されていることでもありますので（追記。「紅もゆる」の詩人沢村胡夷、『紅萌抄』第十卷・別冊）、ここでは「林下のたむろ」と関連する限りで沢村胡夷の略歴を簡単に述べておきます。

沢村胡夷は本名専太郎で明治一七年に生まれ、滋賀県第一尋常中学校、のちの彦根中学を経て明治三六年九月第三高等学校に入学、明治三九年九月京都帝国大学文科大学に進学し美学美術史を専攻。明治四〇年一月先に述べた詩集『湖畔の悲歌』を刊行して、明治四

二年京都帝国大学卒業後、同年九月上京して東京帝国大学大学院に籍を置き近世美術史を専攻、大正四年詩から離れて大正八年九月京都帝国大学助教授に就任、昭和五年五月死去されました。遺骨は三高生のころ下宿していた東山二条佛光寺に埋葬されております。最近の三高同窓会『会報』94(二〇〇一)に命日の墓参の記事がのっております。胡夷は明治三六年に三高に入學して三九年に京大に入り四二年に卒業していますから、明治三六年から明治四二年が三高京大時代であります。京都帝国大学の西洋古典語の田中秀央さんが三高同期です。私は昭和一七年の寮総代のときに、田中秀央さんに寮で話をしてもらおうと思ひまして北白川の自宅に夜お伺ひしたことがあります。大変好意的でありました。沢村胡夷がもし生きておれば、私もそのとき寮で話をしてもらおうと思ひ、お目にかかることがあつたかもしれません。そういうわけで決して遠い人ではないのです。

それでは話を後にしまして、ここで「林下のたむろ」の原譜を最初に、次いで『三高歌集』の曲譜のテープを流します。後の話との関連でとくに聴き所を先にいっておきます。まず「窓による妻の物思ひ」の譜の「モノオモヒ」の「モヒ」の個所と「月、落葉に」の譜の「ラクヨーニ」の「ヨーニ」というところです。この二個所とも同じように下がっています。これが実はこれから話す問題と関連がありますので、その下がるところを注目してお聴き下さい。また二つの曲譜の違いにもご注目下さい。それではテープを流します。

これからまた私の話になるわけですが、この曲はお聴きになってお分かりのように、寮歌調ではないのです。寮歌につきましては、四年前の十八日会で「寮歌の時代」と題して話しましたので、今またここでそれを繰り返すことはいたしません。本日の話に関係する限りで要点を二点だけ述べておきます。

第一点は、寮歌の展開は日本の近代詩の展開に呼応するということであり、日本の近代詩の夜明けは、島崎藤村の『若菜集』（明治三〇年）であります。寮歌の原型は日露戦争前後に作られておりますが、寮歌の歌詞は二分しますと、藤村調と晚翠調になります。晚翠調は漢文調で国士的、一高の寮歌が典型で寮歌の伝統的な型であります。これに対し、藤村調は和文調で叙情的、三高の寮歌がその典型であります。

それどころかこれは前回の話ではいかなかったことですが、『三高歌集』には藤村の詩句がそのまま採られているところが幾つかあります。意外な思いをする方もおられると思いますので、この機会にちょっと述べておきます。たとえば一番面白いところだけ話すと、「自由の空」大正九年神谷清果作詞の一番、歌い出しは「かのバビロンの水青く」です。「かのバビロンの水青く」というのは我々も歌いました。これはそのまま藤村の詩集『夏

草」(明治三二年一二月出版の第三詩集)の「晩春の別離」の中の一句であります。それから同じ「自由の空」の二番「酒か涙か歎息か、迷か夢か皆あらず」というのは我々も歌いました。これはそのまま藤村の詩集「落梅集」(明治三四年八月出版の第四詩集)の「労働雑詠」その一の「朝」、「朝はふたたびここにあり」という「国民歌謡」として歌われましたが、その中の一句であります。この句は昭和六年、なつかしきメロディー「酒は涙か溜息か」(高橋掬太郎作詞、古賀政男作曲、藤山一郎歌)に一音違うだけであってあります。これは藤村の詩がこういう流行歌に流れ込んだ唯一の例といってもよいものであります。「三高歌集」には、ほかにもたとえば「凱歌」、意外ですけれども、藤村の詩句がそのまま採られています。それを指摘するにとどめまして話を先に進めます。

ここまで来れば、もう一つ話しておきますが、昭和一五年谷長茂作詞の最後の寮歌「淡雪流れ」、これは我々が昭和一五年に入寮したときに、吉野大清遊で北村総代部屋が始めて発表しました。その「淡雪流れ」の一番に「泛きつつとほく待つきみの」とありますが、あれは三好達治の『測量船』(昭和五年)の始めにある「春の岬旅のをはりの鷗どり浮きつつ遠くなりけるかも」から採ったものと思われれます。

さて話をもどしまして寮歌の要点の第二点は、寮歌の歌詞を二分する藤村調と晩翠調のいずれも、その代表的な寮歌においてさえ曲の形式は同じであるということです。もちろん

ん違ふものもありますけれども、その代表的な曲の形式は日本の伝統的な音階、五声音階、すなわち西洋の七声音階「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・(ド)」の四番目の「ファ」と七番目の「シ」がない、いわゆる「四七抜き音階」であります。また、それとやらんで付点八分音符と十六分音符の組み合わせが繰り返される、いわゆる「ピョンコ節」という調子のよい音型であります。日清戦争以後に作られた歌の大部分は「四七抜き音階」で、さらにその大部分は「ピョンコ節」であるというのが、日本の代表的作曲家、亡くなりましたけれども団伊玖磨の説であります。三高の明治大正昭和にわたる代表寮歌、「紅もゆる」明治三八年、「紀念祭歌」明治四四年、「行春哀歌」大正三年、昭和に入っても「現なき日の放浪に」昭和八年、これいづれも見事にピョンコ節です。「四七抜き音階」もありません。「現なき日の放浪に」というのは、我々はゆっくり歌っていましたから分らない。あれは早く歌いますと手拍子が合って太鼓が合う、これは典型的なピョンコ節だからです。

四

このように見てきますと「林下のたむろ」は、歌詞からしても曲からしてもいわゆる寮歌調ではない、きわめて異色のものであります。この謎の一曲は一体なんでありましょう

か、ここによくやく本日の話の眼目に到達いたしました。この一曲の謎を長い間暗中模索した細かい経緯は今省きまして一言で申せば、この曲は明治大正期の文芸界の奇人として知られた鈴木鼓村が創始した「京極流箏曲」であります。

そもそも私が、鈴木鼓村が創始した「京極流箏曲」というものの存在を知りましたのは、全く別の関心からひもといた野田宇太郎の『文学散步』、その第一八巻の「関西散步」（京都）に収められた「鼓村の面影」という小文であります。全く偶然に発見したこの小文で鈴木鼓村という人が箏で近代詩、すなわち、高安月郊、薄田泣菫、蒲原有明、与謝野晶子、与謝野鉄幹らの近代詩に始めて曲譜をつけた最初の人で、新箏曲「京極流」の創始者であることを知ったのであります。

しかも鼓村は明治三三年から明治四〇年にかけて京都に在住していたこともこの小文で知り、それは沢村胡夷の明治三六年から明治四二年にかけての三高京大時代と重なりますので、もしかすると胡夷の「林下のたむろ」の曲譜も、この鼓村と関係があるのではないかと推測し、その曲譜を文乙同級の高橋弘一君の長女的美都さん（京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター助教）に高橋君を通じて送って調査を依頼しました。ところが幸いなことにその伝統音楽研究センターに、京極流の和田一久かずひさという人が月に二回来ておりまして、その人が曲譜を見て、これは鈴木鼓村のくせがよく出ている、という美都さん

宛の中間報告をされ、その報告を私が受け取ったのが、去年の秋でありました。

さらに最近美都さんを通じまして、私はその和田一久氏の編著『京極流三代年譜』（平成一四年一〇月初版刊行）を和田氏より頂きました。この本により私は始めて、和田一久氏が昭和四五年三月京都大学大学院（物性物理学）修士課程を修了した人で、同時に京極流三世宗家であることを知りました。しかもこの本は一〇〇部ほどの非売品の限定本で（私の本は五二という数字がついている）、貴重な本であります。これ入手したのが今月の一二日でありました。そういうわけでこれはごく最近のことを話しているわけであり、そこで「林下のたむろ」の曲譜によく出ている鼓村の作曲のくせとは何であるかを、和田氏の中間報告およびこの本に基づいて話す前に、この本には先ほども述べましたように「明治大正期の文芸界の奇人」として知られた鈴木鼓村の秘話の数々が記されており、普通には入手できない本でありますから、その秘話の一端をこの機会に紹介しておきます。しかし、鈴木鼓村といっても普通には知られていませんので、まず鈴木鼓村の略歴を述べさせていただきます。

五

鈴木鼓村（本名映雄^{ていお}）は明治八年九月に宮城県小堤村^{こづみ}に生まれましたので、「鼓村」と

号したのは、生まれふるさとに由来するものであります。明治二三年、東京の陸軍歩兵教導団（少年下士官養成の学校）に入りまして、明治二五年、華族女学校（のちの学習院女子部）の箏曲教授、高野茂（九州系生田流箏曲家）に師事して、本格的に生田流箏曲と作曲を学び始めました。明治二六年陸軍歩兵曹長で満期除隊となっております。このころから本格的に箏曲に身を入れるつもりで「鼓村」と号し始めたといふことであります。

明治二七年の日清戦争勃発にさいしては、歩兵曹長として仙台第二師団より出征して功績により陸軍少尉、さらに台湾征討により陸軍中尉に昇進して、明治二九年、陸軍を退役。文部省の歴史と国文の中等教員の検定試験に合格して、明治三三年一月、京都府立第一尋常中学校（京都一中、当時は三高の南側）に奉職。一中は生徒数が増え、四月、京都府立第二中学校が開校されたので鼓村もそれに転じましたが、この年の冬、歴史の授業の折に視察に来ていた文部省視学官の横柄な態度に怒り、視学官の襟を掴んで放り出したため解雇され、本格的に箏曲家として立つ決心を固めたといふことであります。

これから明治四〇年五月の東京への転居までが、鼓村の最初の京都在住の時代で、これが沢村胡夷の三高京大時代、明治三六年から明治四二年までと重なるわけであります。鼓村はのち、大正一三年秋ふたたび京都に移り、吉田神楽丘の稻荷神社の東に転居して昭和六年三月死去。墓は吉田神楽丘の黒住教神葬墓地（宗忠神社の南隣）に「那智俊宣之墓」

と刻まれてあります。この「那智俊宣」というのは大正七年に改名したもので、大和絵の絵描きとしての雅号であります。通例は「鈴木鼓村」が箏曲に密着した呼び名であります。鈴木鼓村の最初の京都在住時代には、主として寺町丸太町下ル、下御霊神社しもごりょうの前に住んでおり、寺町は安土桃山時代は東の京極と呼ばれておりましたので、「京極流箏曲」と称するにいたったわけであります。これは明治四一年、京都の友人の宮中顧問官二条基弘公爵の命名によるもので、始めから京極流とはいっていません。京都在住時代は「新箏曲」あるいは「国風音楽」などといっていました。

この最初の京都在住時代には、詩人高安月郊が主宰した「詩人会」に参加し、月郊が箏曲改革を語る鼓村に対し、新しい箏曲には詩と音楽が一致するのが第一義であると助言して、「静しずか」という詩を与えました。明治三四年五月鼓村が、この「静」に曲譜を付けて演奏したのがいわゆる京極流、命名は後になります。新箏曲「京極流」の発足であります。でありますから昨年平成一四年一〇月、今は福井に宗家がありますので、福井で京極流箏曲創立一〇一年演奏会が行われたわけであります。なお鼓村が詩人薄田泣菫を知るにいたりましたのも月郊の紹介であります。また鼓村は沢村胡夷の詩集『湖畔の悲歌』の序文を書いた嶋華水（文次郎、当時京大の図書館長）、この嶋華水らの組織した文学団体「銀峯会」にも参加し、さらにはまた吉田恒三、東京音楽学校出身でピアノをよくし、当時京都

師範学校に勤務、のち五線譜の楽譜『新箏曲第一編』（明治三八年一月出版）を作譜した吉田恒三が主となって設立された「京都音楽会」（明治三五年九月創立）にも参加しております。鼓村はまた雑誌『明星』にも寄稿し、「新詩社」の集会にも出席しております。東京在住時代の当時の文芸界との交流、たとえば明治四一年一二月に発足した北原白秋、吉井勇らの「パンの会」への出席などは、今は省きまして、文芸界の奇人として知られた鈴木鼓村の秘話の一端を紹介しておきます。

まず鼓村は肥満体で大食らいで、明治三八年日露戦争にさいして召集を受け郷里の連隊に入隊したが、二四貫もある肥満体でありますから昔の軍服のボタンがはまらず、貫目多量つまり目方が多過ぎるといふので不合格になりました。このとき兵舎での昼食の折に、二合入りの食器四杯とみそ汁をバケツに半分平らげて当番兵がびっくり仰天したという話があります。この帰り東京に立ち寄り「新詩社」の集会に出席して箏曲を披露し、また蒲原有明を知ったのであります。

また鼓村は女の弟子に手を付けるのが早い、また逃げられるのも早いのです。明治三八年八月、最初の妻（明治二九年結婚）が鼓村のもとに出入りしていた男と駆け落ちしまして、これは離婚しました。同年九月、京大助教授（建築学）の妹と結婚しましたが、三ヶ月で逃げられる。翌明治三九年五月に女弟子の一人と同棲しましたが、これは一〇日も経

たないうちに逃げられる。同年一月に出町の車屋の娘で一六歳の女弟子と同棲を始めてこれを溺愛し、一二月に入籍しております。明治四〇年六月、赤坂の星ヶ丘茶寮で開かれた河井醉茗の「詩草社」(京都の胡夷も加わる)の発会式に、この新妻を連れて出席し席上で弹奏しております。ところが鼓村は経済観念がない上にこの新妻がまた底抜けの浪費家で、演奏会の収入は全部妻に使われ、挙げ句のはて鼓村の演奏旅行中に男と駆け落ちして、これもまた逃げられてしまったわけであります。鼓村はとくにこの車屋の娘との結婚にからみ、女弟子に見境なく手を付けるといふ悪評が立ち、鼓村の女弟子たちはこののち、鼓村の弟子というだけで縁談に差し支えが出たほどでありました。丁度このころ明治三九年、鼓村は「新詩社」の同人石上露子いそのかみと出会ったのであります。石上露子(本名杉山孝子)次男杉山好彦は昭和九年三高文丙卒、昭和三年春自殺をいたしました。三高に縁のある人がおります。この石上露子との出会いについては、知る人ぞ知るでいろいろ話があります。今は細かいことは申しません。

しかし、箏曲家鼓村の才能は確かにありました。宮城道雄も大正四年朝鮮の京城で鼓村の演奏を聴き、敬意を表したほどであります。一方、鼓村は宮城道雄に対して冷淡でありましたが、京極流二世宗家の雨田光平あまだは宮城道雄の崇拜者で親交がありました。雨田光平の名前が出ましたのでついでに話しておきますと、昭和二二年、福井在住の雨田光平は、

当時福井の三国に疎開していた三好達治と親しく交際しておりました。三好の戦時中の詩「ことのねたつな」、これは昭和一八年一月刊行の詩集『寒柝』^{かんたく}に収められておりますが、この詩で示されているように、三好は伝統芸術としての箏曲に関心を寄せていただけに、二二年八月に雨田光平の彈奏を聴いて、「箏が喜んでゐる」と満足して、その感動のもとに作ったのが「偶成」と題する詩であります。これは死の二年前の昭和三七年三月刊行の最後の詩集『百たびののち』に収められております。「室に客ありほのかに琴をかい鳴らす」に始まる詩であります。三好はとくに鈴木鼓村の「紅梅」の曲、「紅梅」は薄田泣菫の作詞でありますが、それに曲をつけた鼓村の「紅梅」の曲を好み、盃をおいて瞑想するように聴き入っていたというのであります。それどころか、三好は雨田光平に入門さえしましたけれども、稽古は三度ほどしか機会がなく、昭和二四年二月、三国から東京に移ったわけであります。三高出身の詩人沢村胡夷と三好達治が、いずれも京極流箏曲と関係があるとは不思議な縁を感じます。

六

ここまで話せば、鈴木鼓村が創始した京極流箏曲と一言で申しても、ある程度お分かりになると思いますが、それでは鼓村が創始した京極流箏曲の特徴とは一体なんであるか。

これは和田一久氏によれば、旋律の末尾を五度さげる、という特徴であります。先ほどお聴きになった「物思ひ」と「月、落葉に」のところであります。のちに大正三年、中山晋平が「カチューシャの歌」の作曲に苦心していたときに、鼓村が「別れのつらさ」の末尾を五度下げないようにヒントを与えて、その結果大流行するようになったということであり、この特徴が「林下のたむろ」の「物思ひ」と「月、落葉に」のところの曲譜に見られるというのであります。

さらに和田氏によりますと、『林下のたむろ』の原譜は旋律が複雑で、とても歌いにくい、これを歌いやすくしたのが『三高歌集』所収の曲譜ではないかと考えるということ、その点は私の推測も同じであります。なお、和田氏によると、鼓村は「林下のたむろ」について何も言及していないが、原譜には鼓村の旋律の特徴があるので、作曲者不明のこの曲の成立にも鼓村が関与していた、旋律のヒントを与えたことはありうる、吉田恒三が作曲したかと推定している、ということでもあります。

それでは、明治三七年の『嶽水会雑誌』には「林下のたむろ」沢村胡夷作歌とあって、曲譜があつて、そして歌詞が続いており、これは『三高歌集』も同じで沢村胡夷作歌ですが、これはどのように考えたらよいのかということでもあります。まず「作歌」というのは、岩波の『国語辞典』によりますと、「和歌を作ること。また、その和歌」であります。括

大しても「作詞」であります。「三高歌集」を見ましても、たとえば「旅愁」岩崎真澄作歌、本庄良教作曲となっておりますし、「柔道部遠征歌」永松之幹作歌、小野美津子作曲となっております。一人が作詞作曲したときは「寮歌」辻村三郎作詞作曲となっております。また「水上部歌」も明治三十九年沢村胡夷作詞、小野秀雄作曲となっております。つまり作歌と作曲は「三高歌集」の用例でいいまでも区別しております。持って来ました写真版は明治三十九年刊行の箏曲乙号楽譜「紅梅」の楽譜でありますが、「薄田泣菫作歌鈴木鼓村作曲」となっております。つまりこの当時においても作歌と作曲は区別しております。

それでは明治三十七年の『嶽水会雑誌』の作歌を作曲と区別するとしますならば、そこにある曲譜の作曲者はだれであるか、ここで注目すべきことはこの時期の曲譜は『三高歌集』に収められている「紅もゆる」最初の印刷物、これを見ましても分かりますように、この右に「紅もゆる」の楽譜がありますが、数字の譜であります。しかるに明治三十七年の『嶽水会雑誌』の「林下のたむろ」の楽譜は五線譜です。これは珍しいのです。しかもこの曲は箏曲であります。箏曲の五線譜です。当時京極流の箏曲の楽譜は、先に挙げた明治三十九年の箏曲の楽譜が示しておりますように、京極流の縦楽譜の形式であります。この箏曲を洋楽の五線譜で、先ほど言いましたように、明治三十八年楽譜「新箏曲第一篇」を作譜したのが先にも述べた吉田恒三、すなわち東京音楽学校出身でピアノをよくして「京都音

樂會」を設立し、それには鼓村も参加しておりました。吉田恒三であります。京極流三世宗家和田一久氏は『林下のたむろ』の原譜には鼓村の箏曲の旋律の特徴があるので、作者不明のこの曲の成立にも鼓村が関与していた、旋律のヒントを与えたことはありうる、吉田恒三が作曲したかと推定しております。その根拠を和田氏は述べておりませんが、おそらく今述べたような当時の状況があるのではなからうかと私は推定いたしております。しかもここに注目すべきことは、『三高歌集』の水上部歌は明治三十九年沢村胡夷作詞小野秀雄作曲、明治四一年沢村胡夷作詞北條静作曲、明治四二年沢村胡夷作詞久保東洋士作曲と、胡夷は水上部歌を三篇残しておりますが、その前後の明治三八年と明治四三年の水上部歌の作曲はなんと吉田恒三であります。そればかりか明治四四年の野球部歌もこれは深尾巢卓作詞、深尾巢卓は同年の記念祭歌の作詞者であります。その深尾巢卓作詞、吉田恒三作曲であります。これらの吉田の曲はいずれも先ほど述べたピョンコ節であります。そして沢村胡夷も深尾巢卓も嶽水会雑誌部の理事でありました。おそらく沢村胡夷と吉田恒三、吉田恒三は三高出身ではありませんけれども、沢村胡夷と吉田恒三が接触交流した可能性は高いと思います。明治三七年の「林下のたむろ」の五線譜も吉田恒三が作曲したものでなからうかと私は推定いたしております。『林下のたむろ』の原譜を吉田恒三が作曲したのではないかという和田一久氏の推定は私の推定と一致いたします。

なおこれは甚だ大胆な推定であります。先に述べた「紅もゆる」の最初の印刷物の楽譜にある「ヲム」の頭文字は諸説ありますが、私はこの吉田恒三の可能性もあるのではないかと推定をこの機会に述べておきます。これは本邦初発表であります。明治三七年「林下のたむろ」はこの吉田恒三が作曲したのではないかと推定、明治三八年の水上部歌は吉田恒三作曲です。明治四三年の水上部歌の作曲も吉田恒三です。明治四四年の野球部歌にいたってはあの深尾巢阜と組んでこの吉田恒三が作曲しております。これまでおそらく何百人何千人の者が『三高歌集』を見たでありましようけれども、そこで吉田恒三に着目した者はいないと思います。「京都音楽会」、さらには当時の京都の文化圏、鼓村もその中におりました。「京都音楽会」、鳴華水の文学団体「銀峯会」、この沢村胡夷も深尾巢阜も嶽水会雑誌部の理事であります。いわば三高文化のリーダーであります。ですからそういう京都文化圏の中で見なくてはいけない。三高の中だけで見ていたのでは分からないことがあるのです。そういう京都文化圏の中で見ますと、ここに出てくる吉田恒三、これに注目すればなんと意外なことが出てくるのであります。今まで三高同窓会報を見ましても吉田恒三という名前は出て来ないので。みな山村孝之祐とか何とか言っております。

諸説ありますが、私は甚だ大胆な推定でありますけれども、「A. N.」の頭文字は吉田恒三の可能性もあるのではないかという推定をこの機会に述べておきます。しかし私は歴史家でありますから、文献的に確認できない限り推定の域を出ません。

思えばこの「林下のたむろ」を歌い覚えて六〇年、もちろんこればかり考えていたわけではありません。私の専門は別であります。本来の専門は西洋史でこれはすでに仕事をまとめて引退しておりますから、現在の本来の日課は新約聖書をギリシア語原典で読むことでありまして、いままで述べたのはみんな私の余技であります。しかし、歌詞からしても曲からしてもいわゆる寮歌調ではない、きわめて異色のこの一曲の謎を長い間暗中模索していまやここに意外な結果に到達いたしました。「道は六百八十里」であります。もちろん私はここで扉を開いたに過ぎず、未確認未調査の問題はまだ扉の奥にあります。しかし、それはもはや他の方にお任せするよりほかありません。それではこれをもって本日の私の話を終わります。

(名古屋大学名誉教授)